

國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕 橋本富太郎著 『廣池千九郎：
道徳科学とは何ぞや』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 大誠, Fujita, Hiromasa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000344

〔書評〕

橋本富太郎著 『廣池千九郎——道德科学とは何ぞや——』

藤田大誠

本書は、大正末期から昭和初年の時期にかけて「モラロヂー」(道德科学)といふ「新科学」(新たな学問分野)を提唱し、現在「公益財団法人モラロジ―研究所」や「学校法人廣池学園」(麗澤大学等の諸学校を経営)などの諸団体へと発展してゐる「道德科学研究所」や「道德科学専攻塾」の創立者として知られる廣池千九郎(ひろいけちくろう 慶應二年(一八六六)～昭和十三年(一九三八)、享年満七十二)の本格的評伝であり、「ミネルヴァ日本評伝選」の一冊として刊行された。

廣池に関する言及は従来、人名辞典でも不十分な記述が目立ち、また、特定テーマに偏る一面的な主張も多かつたが、本書が指摘する如く「その主な要因は、廣池の事跡が多岐にわたり、それぞれの分野で異色の存在だから」(iii頁)であらう。

本書を繙くと、廣池が出生地の中津で物した地方史研究の先駆的業績で「アーカイブズ」を日本で最初に紹介した『中津歴史』、京都在住時における『史学普及雑誌』(国学研究雑誌の一種)の独力刊行、皇室を正面に据ゑた歴史書『皇室野史』、平安

遷都千百年を記念して編纂された『平安通志』の下請負、東京在住時における百科全書『古事類苑』編纂事業への参画、早稲田大学講師時代における国文法書『てにをは廢止論』、漢文法書『支那文典』、『東洋法制史』分野を開拓した『東洋法制史序論』や「法学博士」の学位授与を受けた論文「支那古代親族法」などを収録した『東洋法制史本論』、神宮皇學館教授時代における神宮と万世一系研究の成果『伊勢神宮』（後に増補改訂して『伊勢神宮と我国体』）、天理教本部における顧問や天理中学校長としての活動、「道徳科学」研究の序章としての『日本憲法淵源論』、試論としての『道徳科学の論文』、『道徳科学研究所』の設立、千葉における「道徳科学専攻塾」（各種学校）の開設など、いづれも独創的な廣池の事跡が縷々紹介されてゐる。

廣池は師範学校受験に二度失敗したため（応募試験にて初等師範科教員免許取得）、小学校と洋学校「中津市校」の卒業後は学校教育を受けてゐないが、本書では、南豊儒学の系譜を引く小川含章（麗澤館）入塾、国学の大家である井上頼因（神習舎）入門、『古事類苑』編集長の佐藤誠実、法学者の穂積陳重といふ「四人の師」をはじめ、多彩な学者に薫陶を受け、様々な交友を重ねつつも独学で道を切り開き、幾度もの大病を乗り越え「道徳科学」を打ち立ててゆく様が活写されてゐる。

著者は、國學院大學に提出した博士学位申請論文「近代日本における神道と道徳—廣池千九郎を事例として—」により「博士（神道学）」の学位を取得されてゐる。現在、麗澤大学外国語学部助教・公益財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター廣池千九郎研究室主任研究員を務められてゐることからも、廣池千九郎の評伝執筆者として誠に適任である。

しかし、所属団体・大学の創立者を対象とする「評伝」の執筆といふ営為は、たいへんなプレッシャーを感じながらの作業だったのではないかと推察する。勿論これはあくまでもモラロジー研究所や麗澤大学とは全く無関係な評者の憶測に過ぎないが、特に廣池千九郎については、その門下並びに内外の諸先輩による顕彰事業や伝記研究の分厚い蓄積があるだけに、廣池の生誕百五十年に当たたる平成二十八年を期して関係団体外部の出版社から刊行された初の本格的評伝である本書の持つ重みは、著者自身が最も切実に感じてゐるところではなからうか。

本書は「評伝」といふ性格上、廣池に関する先行研究への言及は必要最小限に留められてゐるが、著者の博士論文第二章「研究史上の廣池千九郎」では、主に昭和四十年代以降に本格化した多岐に亙る廣池千九郎研究の到達点と課題が詳しく整理されてをり、門外漢の評者にとつては本書の位置付けを考へる上で

たいへん有益であつた。先行する廣池の伝記としては、佐藤巖編『道徳科学の論文の附録 廣池博士の學問上に於ける経歴』(道徳科学研究所、昭和三年)、モラロジ―研究所編『資料が語る廣池千九郎先生の歩み』(広池学園事業部、昭和四十八年)、横山良吉『廣池千九郎先生小伝』(広池学園事業部、昭和五十一年)、井出元『人生の転機―廣池千九郎の生涯―』(広池学園出版部、平成七年)、同『廣池千九郎の思想と生涯』(広池学園出版部、平成十年)などがあり、特に十余年に亙る共同検討作業が結実したモラロジ―研究所編『伝記 廣池千九郎』(財団法人モラロジ―研究所、平成十三年)は、その生涯の全貌を最も網羅的に描いた全七百三十五頁の決定版であるが、読み易さといふ点を非常に重視したために引用史料が現代語訳されてゐるなど、學術研究の上からは一長一短のある書物といへよう。

では、廣池伝記研究の系譜に新たな一頁を加へることとなつた本書の特色は奈辺にあるのか。本書では、テーマ毎に纏められた『伝記 廣池千九郎』とは聊か異なる叙述方針を採り、時代順に全体の流れが捉へ易くなることを心掛けるとともに、当時の雰囲気や忠実に伝へるため引用史料はなるべく原文を尊重してゐる(四四五、四四六頁)。その構成は、「まえがき」や「あとがき」、略年譜などを除くと次の如くである。

第一章 中津と『中津歴史』

第二章 歴史研究から東洋法制史の開拓へ

第三章 神道の研究と信仰

第四章 「道徳科学」の確立と展開

終章 廣池没後の動靜

著者は、「生涯の苦勞と事業を起こした『中津歴史』の時代に始まり、それを承けて歴史家となり法制史を専攻し、さらに途中で宗教家に転じ、最後に人生のすべてを道徳科学の研究と教育に結実させた人生だった。本書は廣池の生涯を四章構成としているが、これは起承転結にあたる」と述べてゐる(四四六頁)。また、廣池が到達した「道徳科学」のルーツを、一時期教団本部の幹部として活躍した天理教のみに結び付けて捉へる宗教学者らの議論には妥当性が無く、人生上の「救済・報恩」の問題と「道徳科学」へと展開する「理論・教育」は別々の問題として捉へるべきで、その理論体系の形成過程は「廣池の人生そのもの」だとも評してゐる(二八三、四四六頁)。

なほ、本書の副題「道徳科学とは何ぞや」は、廣池の名著『道徳科学の論文』第一巻第一章の見出しである。これには「廣池の人生を問ふことは、その道徳科学の成り立ちを問ふこと」といふ著者の思ひが籠められてゐるが、関係者間では平板すぎる

と不評であつたらしい（橋本富太郎「日本評伝選『廣池千九郎』の執筆について」『麗澤大学紀要』第百巻、平成二十九年）。副題には、天理教で批判を受けた廣池があへて抗弁せず去つた際に体得した格言「慈悲寛大自己反省」「天の岩戸」神話を、「天祖」天照大御神が乱暴狼藉を行つた須佐之男命を許容し自らの不徳を省みて籠られたと理解）も考へられたが、著者はこの格言の字面を見ただけでは真意が伝はりにくいことから避けてゐる。本書を通底する主題を鑑みれば、賢明な判断であらう。

また、中津高等学校校訓導時代の廣池による初の単著『新編小学修身用書』全三巻（明治二十一年）に触れ、「その後、歴史・言語・法制・神道等を辿り、最終的にそれらを集大成して、新たな道徳論を打ち立てた『道徳科学の論文』（昭和三年）に結実」し、「道徳の内実と実効性」を主題とする「最初の著述と最終的な主著とが、この一本の線で結ばれている」と指摘する（七五頁）。さらに「廣池のルーツとして、家庭環境と大分儒学の伝統を明らかにすること」に重点を置き、「廣池の道徳科学の基本的な考え方は、三浦梅園の時点ではほどこがっていたことが理解されたことと思う。廣池はそれを近代科学へ進め、さらに日本の精神文化の深みを添えるとともに、恒久的な教育体系へと展開した」（四四六頁）といふ学問の系譜に着目してゐる。

のも興味深い。因みに、廣池が今際の際に「おまえが一番の功労者だ。ありがとう」と伝へた妻・春子の苦悩が具に描かれてゐることも本書の特色の一つである（四〇三頁）。

廣池の人生全体を捉へる中で「道徳科学」形成を理解しようといふ著者の執筆意図は貫徹されてゐる。また、本書では、廣池の超人的な学問的営為のみならず、家族生活や度重なる失敗経験とその反省など、人間臭さ溢れるエピソードも多々描かれてをり、魅力的な廣池の人物像を存分に引き出してゐる。

著者は、廣池が「道徳科学」に至つた経緯について、「人々を道徳実行へと誘ひ、平和と幸福を実現しようというのは、中津時代から抱いていた宿願であつた。これを途中、宗教的に実現しようと思つたが、宗教的言説は、異なる信仰を持つ者の間には反発が生じ、全世界で普遍的に共有することができない現実があつた。また、文明化した近代においては、道徳も、単なる伝統や教訓のままでは説得力が弱く、人々を納得させるためには科学的根拠が必要だつた。廣池は、宗教や伝統の価値を十分に認めつつも、これらの課題を克服するため、世界のあらゆる場面に通用する普遍性と、科学的根拠のある論理性、これら二つを備えることを自身の道徳論に課した」と述べ、「こうした研究姿勢は、かつて取り組んだ『日本国体の研究』つまり、

皇室の万世一系の原因探究へと、文字通りさかのぼる」と指摘する(二八六、二八七頁)。そして具体的には、廣池自身が『道德科学の論文』で示した「新科学モラロジー」建設の端緒(ルーツ)として、明治三十年頃に井上頼圀より勧められた「日本国体の研究」(皇室の万世一系の研究)、次いで同四十一年の『伊勢神宮』編纂を挙げていることに着目してゐる(一四三頁)。

本書の本領、最大の意義は、著者が研究を積み重ね、博士論文にも結実させた論点、即ち廣池千九郎の思想・学問形成における、日本国体の中核としての「神道」やそれを探究するための総合的学問「国学」と「道德」との関係如何に対する考察にある。それは、廣池の皇室史に対する取り組みや、廣池の神宮皇學館時代における「神道」研究・教育(特にこの点は創見が多い)に関する叙述として反映されてゐる。これらは「固有神道への信仰を土台として、その上さらに現代の神道としての天理教を重ねて信仰するという態度」(二二三頁)や、『道德科学の論文』において、ソクラテス・イエス・釈迦・孔子とともに「日本皇室の御祖先天照大神及び日本歴代の天皇の御聖徳を中心とする道德系統」を「最高道德の実行者」として挙げたこと(三三六頁)へと繋がる、廣池の伝記上、極めて重要な論点であり、さらなる研究進展が期待されるところである。

なほ、著者には今後、解明していただきたい点も多い。例へば、天理教内における廣池の敵役で登場する大宮兵馬・三橋要也・大川真澄・稲村真里は、皇典講究所・國學院、神宮皇學館人脈に連なる国学者(廣池と同様、井上頼圀とも密接な関係があるはず)であるが、祝詞研究の大家として知られる稲村以外、その経歴さへ不明点が多い。従前の廣池研究は専ら戦後の天理教側資料に依拠して来たが、国学者側の観点からも再検討する必要がある。また、廣池千九郎の実弟である廣池長吉と一松又治が國學院出身(二期生と十期生)であることも気になる。特に神宮神部署にも務めた又治は、『日本社会神道学序論』(社会神道政策会、昭和十三年)等を著し、「神、君、民三位一体の精神」に基づく「社会神道学」を提唱してゐる。千九郎と彼ら、さらには國學院人脈との関係もより詳しく知りたい。

かかる評者の勝手な願ひはともかく、小・中学校の「道德」教科化が目睫に迫る現在、道德教育史上で再評価されつつある廣池千九郎の波瀾万丈の人生と「道德科学」の形成過程を丁寧に描いた本「評伝」は、皮相な道德教育に陥ることを避けるためにも、広く読まれるべき一書であるといへよう。

(四六判、四九八頁、ミネルヴァ書房、平成二十八年十一月発行、定価三五〇〇円+税)